

トマス・ハーディの『日蔭者ジュード』：登場人物を通して見るイギリスとオーストラリア

著者	橋本 史帆
雑誌名	研究論集
巻	99
ページ	21-37
発行年	2014-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006060

トマス・ハーディの『日陰者ジュード』 — 登場人物を通して見るイギリスとオーストラリア

橋 本 史 帆

要 旨

本論では、19世紀イギリスとオーストラリアとの国際関係や、イギリスの実情を言外に表出している『日陰者ジュード』の登場人物たちの人間模様を検証していく。イギリスとオーストラリアにおいて、アラベラがジュードとカートレットとの間で繰り返す結婚や別れは、本国イギリスの覇権主義を批判し、植民地オーストラリアを高く評価するハーディの見方を明らかにするものである。また、オーストラリア人のリトル・ファーザー・タイムを息子として迎え入れるイギリス人のジュードとスーの同棲婚は、イギリスとオーストラリアによる、友好的で対等な関係を構築しようとする国同士の試みに読み替えることができる。しかし、ハーディはこの同棲婚の終わりに、両国の共生の難しさを描出していると思われる。このようなところから、登場人物たちが織り成す人間関係は、ハーディが読み取ったイギリスとオーストラリアの関係性を代弁していると考えられるのである。

キーワード：イギリス、オーストラリア、同棲婚、結婚、国籍

はじめに

トマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)の最後の大作『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)¹ は当初、*The Simpletons* というタイトルで1894年12月に『ハーパーズ・ニュー・マンズリー』誌に連載された。しかし、その翌月からそのタイトルは*Hearts Insurgent*に変わり、標記のタイトルになったのは1895年に一卷本として、オズグッド・マキルヴェイン社から出版された時であった。最終的には変更されたが、*Hearts Insurgent* というタイトルが示すように、『日陰者ジュード』は、主として、主人公のジュード・フォーレイ(Jude Fawley)とスー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)が彼らの生き方を通じて、上流・中流階級に支持されていたヴィクトリア朝社会のキリスト教の世界観や結婚制度に疑問を呈し、それに代わるべき男女の結びつきを模索した小説である。実際、ジュードとスーは法的に結婚という手順を踏まずに一緒に暮らす同棲婚を選択して、家庭を維持し、子供たちを育てていくのであるが、多くの批評家はこのような彼らの生き方が、結婚制度の問題点や女性の社会における役割の見直しを訴

え、新たな結婚形態を提示していると解釈してきた。例えば、パトリシャ・インガム (Patricia Ingham) はその研究書の中で、ジュードとスーがお互いへの愛情や信頼を生涯抱き続けることを誓わなければならない一夫一婦制をとる結婚制度のもつ問題点を暴き出しており、ハーディは社会が女性に押し付けている役割を批判していると指摘している (149)²。

しかし、本論で注目したいのが、『日陰者ジュード』を含む「ウェセックス小説」(Wessex Novels)³ と呼ばれるハーディの小説群が、イギリスやその植民地を中心とした19世紀の政治的・経済的・社会的状況を網羅しているという点である。事実、ハーディは、4冊目の長編小説にあたる『狂乱の群れをはなれて』(*Far From the Madding Crowd*, 1874) の Wessex Edition の序説の中で、小説がヴィクトリア女王 (Queen Victoria, 即位期間: 1837-1901) の時代に生きていた人々の物語であり、「近代的なウェセックス (“a modern Wessex”）」(3) を舞台にしていると説明している。このように、ハーディの小説世界は、19世紀、とりわけ、小説が書かれた19世紀後半頃のイギリスとその植民地や諸外国との関わりによって構築されていると言えるのである。実際、ハーディが当時の国際情勢に関心を示していたことは、その創作活動からもうかがい知ることができる。例えば、短編小説「運命と青いマント」 (“Destiny and a Blue Cloak”, 1874) には、大学に進学することなく、インドの高級官僚であるインド高等文官 (Indian Civil Service) を目指して勉学に励み、ついにその資格を取得した一般庶民のオズワルド・ウィンウッド (Oswald Winwood) が登場している。オズワルドの ICS になりたいという願いは、一般のイギリス人が植民地支配に便乗して、立身出世することを当然のこのように思っていたことを明らかにするものである。つまり、植民地拡大をよしとするイデオロギーが一般の人々にも浸透していたことに気付いていたハーディは、彼らの心に潜む外国支配への意欲をこの作品に描きこんでいるのである。さらにまた、ハーディの作品には、歴史的に見て植民地の拡大に伴って海外へ渡った多くの移民がイギリスに戻ってきたように、移住や仕事のために渡った先の海外からイギリスに戻ってくるイギリス人や、植民地で生まれ育った人物、外国人の血をひく人物などが頻繁に登場している。このようにハーディの小説は、イギリスを取り巻く国際情勢とその影響下にあるイギリスの内情を描出しているのであり、言い換えれば、ウェセックス小説は、19世紀のイギリスと、それと関わりを持つ国々との関係性に対するハーディの考えの表出として構築されていると言えるだろう。

そこで本論では、『日陰者ジュード』を当時の政治的・経済的・社会的領域にまで広げて読み説いていく。小説の主な登場人物であるジュードやスー、ジュードの最初の妻であるアラベラ・ドン (Arabella Donn)、そして、ジュードとスーが息子として引き取るリトル・ファーザー・タイム (Little Father Time, 以下ファーザー・タイムと略記) らの動向や行動に焦点を当てると、後に本論で詳述していくことになるが、彼らはそれぞれが生まれ育った国や移住した国を何らかの形で反映していると思われる。これら登場人物たちが織り成す人間模様は、字義通り読ん

だ場合の作品の意味の世界を構成している。しかし、その字義通りの意味の深層部には、当時のイギリスとオーストラリアとの国際関係やイギリスの実情を念頭において、作者自身の目からみた国際的な政治的・経済的・社会的力学を表すような作品のもう一つの意味の世界が形成されていると思われる。本論では、19世紀イギリスとオーストラリアの実情を表出している登場人物たちの繰り広げる人間模様を解明していくことで、ハーディが読み取ったイギリスやオーストラリアの国際関係が、どのように小説化されているかを論証していく。

1. ジュードとアラベラの結婚と離別

ジュードの最初の結婚相手は、アラベラという養豚業を家業とする家の娘であった。そして、彼女との結婚生活からは、スーと同棲するに至る迄のジュードの価値観を知ることができる。ジュードの生い立ちを見ていくと、両親を幼いころに亡くした彼は、貧しさの中、パン屋を営む大叔母のドルシア(Aunt Drusilla)によって育てられた。成長したジュードは、社会に貢献できる価値のある人間になろうという高邁な目的を持ち、石工の仕事をしながらオックスフォードを思わせる架空の都市クライストミンスターにある大学に入学し、そこで学問を修め、聖職者となることを夢見るようになる。しかし、これはあくまでも建前であって、ジュードの本音はそれとは別のところにあったことが、次の引用からわかる。

I must save money, and I will; and one of those colleges shall open its door to me—shall welcome whom it now would spurn, if I wait twenty years for the welcome.... And then he continued to dream, and thought he might become even a bishop by leading a pure, energetic, wise, Christian life. And what an example he would set! If his income were £ 5000 a year, he would give away £4500 in one form and another, and live sumptuously (for him) on the remainder⁴. (37)

つまり、ジュードは、大学教育を受け、学問を身に付け、キリスト教会に奉仕することを立身出世のためと考えているのであり、このようなジュードの将来に対する夢は、彼の矛盾した価値観を露呈するものである。作品のタイトルである *Jude the Obscure* のジュードに付けられている“obscure”という言葉には、いくつかの意味がある。『オックスフォード英語辞典』によれば、“obscure”は人の地位や身分や家柄が「低い(“humble”)」という意味や、「目立たない(“inconspicuous”）」(657)という意味がある。このようなところから、定訳となっている邦訳の「日陰者(“the obscure”）」は、下層階級出身で日陰の人生を歩んだジュードの人生を表していると思われる。しかし、“obscure”には「はっきりしない(“not clear or plain”）」、「あ

いまいな(“vague”)] (657)という意味もあり、その意味で考えれば、作品タイトルにある“obscure”は、社会に貢献したいという理想を持ちながら、立身出世の野心に燃えるジュードの矛盾したもう一つの価値観を言い表していると言えるだろう。

ところが、ジュードが憧れるクライストミンスターにおける大学は、ジュードのような出自のものにとっては閉鎖的な組織であった。リチャード・D・オールティックは、宗教的・社会的な理由からオックスフォードとケンブリッジ両大学より排除された人々のために、ロンドン大学を含むユニバーシティー・カレッジが開校されたことに触れながら、下層階級の人々が大学教育を受けることの限界について、次のように述べている。

The university [University College] soon made its presence felt, but even when allowance is made for the number of middle-class students it served, the fact remains that in Victorian England higher education, wherever provided, was reserved for a tiny minority. It was from the upper and upper-middle classes, who alone had access to it—not the obscure, rustic Jude of hopeless ambition—that the learned professions, notably the clergy and the law, were recruited. (254)

さらに、限られた階級の人々だけが通うことを許された大学は、「苗床でラディッシュを栽培するようにそこでは教区牧師らを育てる(“They raised pa’sons there like radishes in a bed”)] (24)所でもあり、よって、英国国教会はこのような大学教育を受けた者たちによって支配されていたのである。加えて、大学や教会の高い地位を独占していた支配者層の力は、植民地においてまで、イギリスの支配者層を頂点とした社会構造を作り上げていった。つまり、ジュードが憧れるクライストミンスターや、そこでの学問と英国国教会は、下層階級、女性、植民地の人々に権力をふるう、イギリスの国家体制を具現するものであると言えるのだ。すると、石工という職人でありながら立身出世を目指し、クライストミンスターが“a man’s one opportunity of showing himself superior to the lower animals” (62)を与える所と受け取って、その点に価値を見出し、それに向かって努力を重ねるジュードは、イギリスの社会体制に憧れを抱く人物として造型されているということになる。

このようなジュードの価値観は、故郷のメアリーグリーンで養豚業を営むドン家の娘アラベラとの出会いや、彼女との結婚生活に顕著にあらわれている。下宿先から大叔母の家に向かう途中で、女友達とふざけ合っていたアラベラと出会ったジュードは、彼女の肉体的魅力の虜になり、彼女との付き合いを深めていく。その一方でジュードは、アラベラのことを、“a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality.” (44)だと見下してもいるのである。つまり、ジュードは自分が下層階級にあ

るにもかかわらず、その階級を蔑み、心理的に肉体労働者との間に距離を置こうとしているのである。そして、このようなジュードの態度は、アラベラとの結婚生活の中でも続いていく。例えば、ジュードは豚の屠殺やその血抜き作業の残酷さに耐えられず、その作業を嫌悪する。豚の脂を溶かす作業をしていたアラベラとジュードが口喧嘩をするシーンでは、ジュードは自分が大切にしていた古典の本を、豚の脂がついた手でつかんで放り投げるアラベラに対し、

“Leave my books alone.... You might have thrown them aside if you had liked, but as to soiling them like that, it is disgusting!” (68)と、激怒の言葉を発している。このように、本を投げつけられたことよりも、本を汚されたことに怒るジュードは、労働よりも学問を重んじており、この点で、彼はクライストミンスター大学の大学に象徴される学問と権威を重視するイギリス国家を体現する人物として、粗野なアラベラと対峙させられているのである。

一方、このようなジュードに対する結婚前のアラベラの反応を見ていくと、ジュードに出会い、彼の若者らしい野望に魅了されたアラベラは、ジュードの気を引くために、切り取った豚の性器を投げつけたり、胸の谷間にコーチンの卵を挟んで見せるなどしてジュードを性的に誘惑する。また、アラベラは友人に向かって、「肉欲を押し殺した奇妙に低い、どすの利いた調子で(“in a curiously low, fierce tone of latent sensuousness”)」、「I want him to have me — to marry me! I must have him. I can't do without him. He's the sort of man I long for. I shall go mad if I can't give myself to him altogether!” (50)と、ジュードに対する情熱的な思いを語るのである。このような、挑発的なアラベラの行動とジュードに対する熱い思いは、アラベラがジュードに性的な欲求を感じていることを明らかにするものであり、ここにアラベラが“animalistic woman” (Carpenter 146)とされる所以がある。

しかし、このようなアラベラではあるが、一方でジュードが大学に進学して、聖職者になろうと日々努力していることを知っていることから、彼が持っている知性と野望にも関心があると考えられる。そして、このようなアラベラのジュードに対する期待は、将来性のあるジュードと結婚することで自分の社会的地位を向上させ、より良い暮らしができるかもしれないという彼女の野心に読み替えることができるのである。つまり、アラベラの潜在意識には、学問や大学教育やイギリスの支配者層の暮らしに憧れ、その彼らの特権をジュードを通して手に入れようとする彼女の願望が働いているのである。

ところが、この願望も結婚後、読書ばかりしていて、経済的に生活を向上させることができないジュードに対する失望に変わっていく。そして、このジュードに対するアラベラの不満の表層下には、彼女が手に入れたいと願った支配者層の特権やイギリスという母国に対する幻滅を読み取ることができるのである。そのことは、ジュードと大喧嘩をしたアラベラが彼に別れ話を切り出し、イギリスを捨てて両親と共にオーストラリアへ移住する決心をする選択の中に示されている。この時、ジュードによると、アラベラがジュードに宛てた別れの手紙の中には、

“There was no prospect of his [Jude’s] ever bettering himself or her.” (71)という内容が書き留められていたとされている。すると、このようなアラベラのジュードに対する落胆には、下層階級の人々に社会的向上の機会を閉ざしている不平等なイギリス社会の因習に対する彼女の批判が込められていると考えられるのである。さらに、アラベラは、“He was such a slow old coach, and she did not care for the sort of life he led.” (71)と学問ばかりに没頭していて、経済的に生活を豊かにできないジュードに反発する。かつて大学進学を目指していたジュードに心を奪われたアラベラは、ジュードとの生活を通じて、学問が実生活の役に立たないものであると気付いたのである。そして、大学に進学することに固執するジュードに対するアラベラの不満は、結果的に、学問の府であるクライストミンスター大学とそのような大学から輩出された人材が占めている支配者層や彼らが手にする特権と、支配者層を頂点にしたイギリスの国家体制に対するアラベラの批判に、間接的に結び付いていると解釈することができるのである。このようなことから、アラベラのオーストラリアへの移住とそれに伴って起こるジュードとの別居生活は、イギリスの権威に憧れを抱いたことが間違いであったと気付いたアラベラが、それとの決別をはかるために取った行為と読み取ることができるのである。

2. アラベラとカートレットの結婚

オーストラリアへ移住した後のアラベラの生活に注目すると、法的にはジュードと結婚している状態のまま、彼女はシドニーにあるシドニーホテルの支配人で、彼女よりかなり年上のカートレットという人物と結婚する。ところが、アラベラは、間もなくカートレットと口論の末、イギリスに帰国してしまう。そして、彼女を追ってイギリスにやって来たカートレットとよりを戻したアラベラは、ジュードと正式に離婚して、カートレットと結婚する。そしてさらに、彼の死後はジュードと再婚することになるのである。それでは、オーストラリアとイギリスの間で展開されるアラベラのカートレットとの生活は、どのように解釈することができるのだろうか。

まず、アラベラがオーストラリアでカートレットと結婚した理由として、彼女に惚れ込んだカートレットに結婚をせまられたことのほかに、オーストラリアで父親の家を出てから生活に困っていたことをあげている。実際、『日陰者ジュード』の出版時期にあたる1890年代のオーストラリア経済は、それ以前のように繁栄しておらず、この時期にやってきた移民たちが職を得ることは難しくなっていた(シェリントン109)。このようなオーストラリアの経済的状況を考えると、カートレットと結婚したとはいえ、アラベラはオーストラリアにやってきた移民たちが直面したのと同じ生活困窮状態に陥っていると思われ、ハーディはこのような移民者の生活状況を、彼女のカートレットとの結婚の経緯に描きこんでいたのである。

しかし、オーストラリア在住のカートレットとの結婚の道を選んだからには、アラベラは一応、オーストラリアに対して親近感を寄せていたものと考えられる。アラベラはオーストラリアに移住してきたものの、既述したように、イギリスにおけるジュードとの結婚は法的には未だ継続していた。しかし、彼女はオーストラリアでカートレットと「本式に—法律に基づいて—教会で」(“Regularly—legally—in church”)(185)結婚しており、アラベラはイギリスの法律ではなく、オーストラリアの法律を尊重し、遵守しているのである。つまり、ジュードとの結婚生活を通じてイギリスへの反発を強めたアラベラは、オーストラリアの法律に則ってカートレットと結婚することで、イギリス人というよりもオーストラリア人として生きる道を選んだのである。

このようなアラベラの結婚には、宗主国イギリスと植民地オーストラリアとの関係性が投影されているものと解釈することができる。カートレットとの口喧嘩がもとでイギリスに一人で戻ったアラベラは、クライストミンスターの酒場でバーメイドとして働いていた時に、ジュードと再会する。ジュードはアラベラから、カートレットという人物とオーストラリアで結婚したことを知らされ、これを“crime”(185)とみなす。これは、ジュードがアラベラとの間で、法的にも教会法においても、正式に離婚していなかったからである⁵。そして、イギリスでジュードと結婚したにもかかわらず、オーストラリアでカートレットと結婚したアラベラの行為を重婚という犯罪だとみなすジュードの見解は、彼が結婚というものをイギリスの法律や教会法を基準として考えていることを暴露し、ジュードの行動規範がイギリスのそれに置かれていることを暗示している。よって、アラベラの重婚に対するジュードの批判は、イギリスのオーストラリアに対するプライオリティを主張する図式として解釈することができる。

これに対しアラベラは、“Crime! Pooh. They don't think much of such as that over there! Lots of 'em do it”(185)とオーストラリアでの結婚を正当化している。彼女のこの言葉は、オーストラリアでは人々が、イギリスの法律や教会法に縛られずに生活しており、アラベラのカートレットとの結婚は、イギリスの法律や制度や規則がオーストラリアでは通用しないことを物語っているのである。ジェイン・L・ボウナスが指摘するように、アラベラの生き方は、植民地にはイギリスとは異なる生き方があり、それが正当化されるべきであることを読者に伝えるものなのである(18)。また、小説『日陰者ジュード』が雑誌に掲載された1894年から七年後の1901年には、オーストラリアでは六つの植民地を中心にオーストラリア連邦が結成され、単一の政治体となって内政自治権が確立された。つまりイギリスにとってみれば、連邦として一枚岩になったオーストラリアの力は、以前にも増して大きくなったのである。このような点に留意すれば、イギリスでは結婚した状態にあることを気にも留めないアラベラのオーストラリアでの結婚は、宗主国イギリスの持つ優位性を反転させる行為として読むことができるのである。

ところが、アラベラはカートレットとオーストラリアで結婚したままで、再び母国イギリス

に戻ることになる。この理由については詳述されておらず、単にカートレットと口論した結果、家を飛び出したことが記述されているにすぎない。さらにまた、母国に戻ったアラベラは、彼女の後を追ってやって来て、ロンドンのラムベスでパブを経営することになったカートレットと、今度はイギリスの法律に基づいて結婚するのである。では、イギリスに失望し、オーストラリア人として生きる道を選んだアラベラは、なぜ再びカートレットとイギリスで結婚したのであろうか。その理由についてアラベラは、ジュード宛の手紙の中で、カートレットから彼女に対する愛情のこもった手紙を受け取ったことと、彼からパブの営業の手伝いを頼まれたことをあげている。さらに、カートレットとの結婚によって、「彼女は暮らし向きをよくして上品な生活を送る見込みができた(“she had a chance of improving her circumstances and leading a genteel life.”)」(192)のであり、結局アラベラは、苦しい経済状況から抜け出すためにカートレットとの結婚を選んだのである。そして、この後、彼女はジュードと正式に離婚し、カートレットと結婚することになる⁶。

しかし、上記にあげられたアラベラとカートレットの結婚理由は作品の意味の表層であって、その下には、植民地から戻ってきた人々が直面するイギリスでの厳しい生活状況が描きこまれていると読むことができる。そこで、当時の海外移住の動向についてみていくと、1870年から1914年のイングランドとウェールズでは、海外に移住した人々のうち40%が母国に戻って来たと言われている(Harper 2)。そして、イギリス社会は植民地から戻ってきた人々を卑下するようなどころがあり、さらにまた、そのような人々がイギリスで再び職を得て、安定した生活を送ることは難しかった(Burke 184)。すると実際に、海外生活を送って戻ってきた人々と同様に、小説世界においてオーストラリアから戻ってきたアラベラが、イギリスで生きていくためにカートレットと結婚するように描出されているのは、現実社会をフィクションの中に反映してのものであるとすることができる。

さらに注目すべき点は、イギリスに戻ってきたアラベラが、オーストラリア人を夫にしているということである。作中では、イギリスにおけるアラベラとカートレットの結婚生活については詳しく述べられていない。しかし、結婚後の二人の関係はカートレットが亡くなるまで続いており、すでに引用した文章を再び用いれば、アラベラはカートレットとの暮らしによって、「彼女は暮らし向きをよくして上品な生活を送る見込みができた」のである。このようなところから、アラベラはオーストラリア人のカートレットを信頼し、カートレットはアラベラに満足な暮らしを与えることができたと考えられ、二人の結婚生活は全般的には幸せであったと推測されるのである。そして、イギリスに戻ったアラベラがオーストラリア人のカートレットを再び夫に選んだこと、さらにこの二人の良好な夫婦関係は、植民地として蔑まれていたオーストラリアが作者ハーディによって高く評価されていることを示す一例と言えるのである。このようなところから、アラベラとカートレットの順調な結婚生活は、オーストラリアに対す

る信頼を表象するものと読むことができるのである。

以上のことから、アラベラとカートレットの二度にわたる結婚の経緯は、作品の意味の表層を形成するにすぎないのであり、その下にはイギリスとオーストラリアの宗主国と植民地の力のバランスの見直しがなされていると読むことができるのである。

3. ジュードとスーの同棲婚とリトル・ファーザー・タイム

ジュードとスーの同棲婚についてみていくと、まずジュードはスーと出会った当初、アラベラと別居した状態であったが、その婚姻関係はまだ続いていた。また、スーはジュードと出会って間もない頃、ジュードの子供時代の学校の先生であったリチャード・フィロットソン (Richard Phillotson) と結婚していた。しかし、互いに惹かれあったジュードとスーは、それぞれのパートナーと別れる。そして、ジュードとスーは法的に結婚しないまま同棲を続けるのだが、このような二人は、当初、結婚に対して異なる考えを持っていた。例えばスーは、結婚という男女の結びつきを、女性を男性に「雌のロバや雌のヤギか、あるいはそのほかの家畜のように」 (“like a she-ass or she-goat, or any other domestic animal”) (170) 引き渡すものだとみており、結婚において女性は男性の所有物としてみなされていると批判する。さらに、結婚は実利主義を標榜する契約だと述べる。

If it [marriage ceremony] is only a sordid contract, based on material convenience in householding, rating, and taxing, and the inheritance of land and money by children, making it necessary that the male parent should be known—which it seems to be—why surely a person may say, even proclaim upon the housetops, that it hurts and grieves him or her? (209)

こうしてスーは、“it [legal obligation] is destructive to a passion whose essence is its gratuitousness” (272) と男女の結婚によって生じた関係は法律に縛られることなく、愛情に基づいたものであるべきと考えるのである。このような法律の枠におさまらない男女の結びつきのあり方を結婚に求めるスーは、この点で、イギリスの国家体制やその伝統と権威を揺るがす思想の持ち主であると言える。

一方、ジュードはアラベラとの離婚が成立してすぐにスーに、“‘Now we’ll strut arm in arm’” と言い、“‘like any other engaged couple. We’ve a legal right to.’” (258) とスーと結婚することを当然のことにように考えている。そして、結婚を拒むスーに対し、“‘I really fear sometimes that you cannot [love].’” (260) と苛立ちを隠せないでいる。このように、結婚とい

う社会的形式に執着するジュードは、イギリスの国家体制やその伝統と権威を重んじている人物と言えるのである。

しかし、時が経つにつれて、ジュードはスーの考えを受け入れるようになっていく。アラベラとフィロットソンとのそれぞれの離婚が成立した後、ジュードとスーは結婚するために登録所に向かう。そこで、結婚の手続きをすることに躊躇するスーを見たジュードは、スーを不幸にするようなことはできないと、法的手続きを取りやめにする。さらに、ジュードは、世間から非難されても、“You certainly are my wife, Sue, in all but law.” (346)と言って、同棲婚を肯定的にとらえ、受け入れている。これと並行して、ジュードはクライストミンスターの大学に進学することや聖職者になる夢を捨てており、ついには、“I perceive there is something wrong somewhere in our social formulas” (327)と社会の現状を批判するようになっていく。つまり、スーとの同棲婚を通じてジュードは、かつて自分もその一員となることに憧れた国家体制やその伝統と権威を疑問視する立場に転じているのである。

同棲婚を始めたジュードとスーは、間もなく、ファーザー・タイムという少年を息子に迎える。そこで次に、このファーザー・タイムについて目を向けていく。ファーザー・タイムという人物は、イギリスでカートレットと結婚をやり直したアラベラがジュードにあてた手紙によると、アラベラがジュードと別れた八か月目に、移住先のオーストラリアのシドニーで生んだ子供である。そして、このオーストラリア生まれでオーストラリア育ちのファーザー・タイムには、当時、当地に移住していたアラベラの両親により送りだされ、一人でジュードとスーの元にやってきた経緯がある。この少年は、“He was Age masquerading Juvenility” (276)と評されるほど奇妙な容姿の持ち主である⁷。さらに、ファーザー・タイムを見たスーは、“It is strange, Jude, that these preternaturally old boys almost always come from new countries?” (280)と言って、ファーザー・タイムの異様な外見とオーストラリアという入植地を結びつけている。このようなところから、ファーザー・タイムはオーストラリアを代わりに表わす「メトニミー」(metonymy)、つまり換喩であるといえるのである。

次に、アラベラの手紙を受け取ったジュードから、ファーザー・タイムの存在を知らされたスーのファーザー・タイムに対する反応に注目することにしたい。スーはまだ見たこともないこの少年について、“I'll do the best I can to be a mother to him” (282)と言って、迷うことなくファーザー・タイムの母親になる意志を表明している。そして、オーストラリアからやって来たファーザー・タイムの風変わりな風貌に驚きつつも、彼を見てすぐに、“I do want to be kind to his child, and to be a mother to him.” (279)と言って、母親になる意志のあることを口にするのである。つまり、このことは、スーがファーザー・タイムとの血のつながりや彼がオーストラリアからやって来たことに囚われることなく、ファーザー・タイムを息子として受け入れる度量の大きな人間観を持っていることを明らかにするものである。ジュードの場合、彼は

ファーザー・タイムの存在を知らせるアラベラの手紙を読んで、“It may be true! I can’t make it out.” (274)とその少年が本当に自分の子供であるかどうかについて疑いを持っている。しかし、すぐにジュードは、“That excessive regard of parents for their own children, and their dislike for other people’s, is, like class-feeling, patriotism, save-your-own-soulism, and other virtues, a mean exclusiveness at bottom.” (274-75)と、どのような子供も受け入れて、愛すべきであると述べるのである。そして、このジュードの考えは、オーストラリア人であるファーザー・タイムが彼の本当の子供であるかどうかという疑問を越えて、少年を息子として育てるジュードの決断に結び付いていくのであり、この点で、ジュードもスー同様に、寛大な人道主義に立っていると理解される。このような経緯から、ファーザー・タイムを家族として迎えるイギリス人ジュードとスーは、権威主義的な姿勢を改め、イギリスとオーストラリアの間にある宗主国と植民地という国際的力学にとらわれないイギリスを具現しているのである。そして、ジュードとスーとファーザー・タイムからなる同棲婚は、そのようなイギリスがオーストラリアに寄り添い、それを庇護する行為に読み替えることができる。

では、息子として迎え入れられたファーザー・タイムの心情について見ていくことにしたい。彼はジュードとスーのもとに到着後、すぐにスーに“Can I call you mother?” (279)と尋ねているのだが、これはファーザー・タイムがスーの息子になりたいという意志表示であり、また、そのような自分を息子として受け止めてもらえるかどうかをスーに確認している問い掛けでもある。また、彼がジュードとスーのもとに引き取られてから数年後、ケネットブリッジの市場で、生みの母親であるアラベラと再会したファーザー・タイムは、アラベラに対し“You be the woman I thought wer my mother for a bit, till I found you wasn’t” (311)と厳しい言葉をぶつけている。このファーザー・タイムの発言は、現在は彼が、育ての親であるスーを本当の母親とみなしていることを表すものであり、彼はジュードとスーの家庭に居場所を見出し、家族の一員としての自覚を持っていると言える。このようなところから、お互いを家族として認めあったジュードとスーとファーザー・タイムの家族関係は、イギリスとオーストラリアの円満な国際関係を示唆するものとして読み替えることができ、ここに、両国に対する作者ハーディの受け取り方が表出されていると思われるのである。

4. ジュードとスーの同棲婚を巡って

当初、オールドブリッカムに二人だけで住んでいたジュードとスーは、それまで自分たちの過去を隠して、“the unnoticed lives” (298)を送ることができていた。しかし、どこからともなくやって来たファーザー・タイムが彼らと同居を始めてから、この三人の関係は“a dead scandal” (298)と同じように、人々の口の端に上ることになり、スーは近所の人々から無視され、

ジュードは石工としての職業を失い、ファーザー・タイムは人々から奇異な目で見られるようになる。この後、およそ三年間、ジュードとスーたち家族は、ジュードの失業による貧困のため、次々と居場所を変える生活を余儀なくされる。そして、最後に移り住んだクライストミンスターで、ジュード一家の関係に変化が生じる。そこで、ジュードたちが、大学の創立記念日を祝うために街を歩くガウン姿の教授たちや、学生たちの荘厳な行列を目にするシーンを見ていくことにする。教員と学生に行列を見たスーは、“I am weak. Although I know it is all right with our plans, I felt . . . an awe, or terror, of conventions I don't believe in.” (329) と言って、クライストミンスターの行列に怖れの感情を吐露している。つまり、この時のスーの口にする言葉は、クライストミンスターが表象するイギリスの権威や伝統を前に、自分たち家族のあり方を正当化する気持ちが揺らいでいることを示唆するものである。

一方で、ジュードは、クライストミンスターに向かって出発する前から、その場所に対するあふれ出る思いを、“Well, I do, I can't help it. I love the place. . . . Nevertheless, it is the centre of the universe to me, because of my early dream: and nothing can alter it. . . . I should like to go back to live there—perhaps to die there!” (320) と述べる。つまり、今やクライストミンスターは、学問を修めて聖職者になる夢を捨ててしまったジュードにとって、懐かしい郷愁を回想させる場所ではないのである。しかし、クライストミンスターに到着したジュードは、皮肉にもクライストミンスターと決別しており、先の引用にあるように、“I perceive there is something wrong somewhere in our social formulas” と社会のあり方、つまりは、クライストミンスターに表象された権威主義のイギリスを批判する心境に至っているのである。この時のジュードは、オーストラリア人のファーザー・タイムを息子にしたスーとの同棲婚を選び取ったことが正しい選択であったと考えているのである。

ファーザー・タイムに関して言えば、彼自身はクライストミンスターに対して違和感を感じている。クライストミンスターにそびえ立っている古い建物を見てファーザー・タイムは、それらは牢獄かと尋ねる。これに対してジュードは、“‘No; colleges,’ said Jude; ‘which you'll study in some day.’” (330) と答える。しかし、このジュードの言葉に対してファーザー・タイムは即座に、“‘I'd rather not!’” (330) と返答するのである。さらに、教授たちや学生たちの荘厳な行進を前に、ファーザー・タイムは“‘I don't like Christminster!’” (330) と率直な感想を述べる。オーストラリア人であるファーザー・タイムのこのような反応は、イギリスの権威や伝統に対する反発と嫌悪感を示すものであると言えるのだ。

ところが、ファーザー・タイムは、ジュードとスーの間にすでに生まれていた異母弟妹と自分がいることで、両親が間借りを断られるという現実を知ってしまう。これにより彼は、特に自分自身の存在が世間から受け入れられないのだという疎外感を味わうようになる。スーと子供たちだけが一晩だけ泊まることを許された部屋で、ファーザー・タイムは、“‘And what

makes it worse with me is that you are not my real mother, and you needn't have had me unless you liked. I oughtn't to have come to 'ee—that's the real truth!' ” (333)とスーとの母子関係を見直し始める。つまり、ファーザー・タイムは、自分が他の家族とは違うよそ者であることを痛感し、自分の存在意義を強く疑問視しているのである。そして、この後、ファーザー・タイムはスーが出掛けている間に、異母弟妹を殺害した上に、自分自身も自殺するという事件を起こす。さらにまた、この子供たちの死をきっかけに、ジュードとスーは同棲を解消することになる。このように、自分たち家族のあり方に自信を失っていくスーと、自分自身の存在やスーとの母子関係を問題視するようになっていくファーザー・タイムの心の変化、そして、家族の離散を招くファーザー・タイムによる弟と妹の殺害と自死は、イギリス人とオーストラリア人から成る家族のあり方を、スーとファーザー・タイムらが自ら否定してしまったことを意味しているのである。そして、このような形で終わりをむかえるジュードたちの同棲婚は、イギリスとオーストラリアの共生の難しさを示唆するものとして読むことができるのである。以上のことから、このような登場人物たちの描き方の中に、イギリスとオーストラリアが対等なパートナーになることは難しいとする作者ハーディの考えが、表されていると考えられるのである。

5. リトル・ファーザー・タイムによる殺人事件の余波

ファーザー・タイムの起こした事件は、ジュードやスーのその後の人生に致命的な影響を与えるものとなる。事件後、子供たちの悲惨な死に対するスーの反応を見てみると、彼女は“yours [your love]—ours [our love]—is the wrong” (345)と言って、同棲婚という結婚形態が間違っただと痛感し、それに固執したことへの罪の意識に苦しんでいる。そして、“My children—are dead—and it is right that they should be!” (363)と子供たちの死を受け止め、スーはジュードと別れて最初の夫であるフィロットソンの元に戻って、彼と再婚するようにストーリーは展開していく。そこで、このようなスーの心境の変化について考えてみると、フィロットソンとの再婚のためにジュードとの同棲婚を解消するということは、彼ら家族が具現していたイギリスとオーストラリアの共存を否定することであると解釈することができる。さらに、スーの再婚相手であるフィロットソンは、かつては大きな小学校の校長であったが、スーと離婚したために、名誉や地位を失い、世間から白眼視され、貧しい生活を強いられていた。そのため、フィロットソンはスーとの離婚によって、“I did myself irreparable damage” (366)と考え、“it [marriage] will set me right in the eyes of the clergy and orthodox laity” (365)ということを期待し、失った教員の地位や名誉が回復されるであろうと喜んでいるのである。するとつまり、社会的立場を挽回したいフィロットソンと、教会において法律に従ってスーが再

婚するという事は、スーがイギリスの国家体制やその権威や伝統を受け入れてしまうことになるわけである。

しかし、注目すべきはフィロットソンと再婚したスーの様変わりである。フィロットソンとの結婚後、彼女は“a wild look of aversion” (398)を浮かべながらフィロットソンのキスを受けることになり、“Quite a staid, worn woman now”に成り下がってしまう。そして、このようなスーについて、ジュードとスーの関係を見守り続けてきたエドリン寡婦(Widow Edlin)が、“’Tis the man;—she can’t stomach un, even now!” (408)と敏感にスーの本音を指摘しているように、スーの再婚は本心からのものではないと思われる。実際、スーは、再婚した彼女を訪ねてきたジュードの“You do love me still?”という問い掛けに、“I do! You know it too well!” (389)と言って、彼にキスをしており、内心、ジュードとの同棲婚が自分自身に対して正直な結婚形態であったということを暗に認めているのである。

また、ジュードもスーと同じように同棲婚に満足している。スーの再婚にショックを受けたジュードは、カートレットと死別して未亡人となったアラベラの誘いに乗って、酒を飲んで酔っ払ったあげく、アラベラと縊りを戻すことになる。しかし、ジュードは、フィロットソンとの結婚こそが人間としての正しい道であるというスーに向かって、“we are acting by the letter; and ‘the letter killeth!’” (388)とあって、形式だけで内実の伴わない結婚制度に異議を唱えている。なお、“the letter killeth”は、作品の巻頭にエピグラフとして掲げられており、これは、新約聖書のコリントの信徒への手紙二の第三章第六節にある「文字は殺しますが、霊は生かします」の前半部から引いてきたものであり、使徒パウロがギリシアの都コリントにある教会とそこに住む人々に、自分とその仲間について紹介した手紙の一部からのものである。

“the letter”は炭によって書かれた文字や、石碑に刻まれた文字を指しており、“the letter killeth”は、精神を失った形式的で中身の無い文字だけの教えは人を殺してしまうという意味である。つまり、“the letter”とは、スーがかつて“the social moulds” (205)と批判したキリスト教やイギリスの社会制度を指しているのである。そして、“we are acting by the letter; and ‘the letter killeth!’”というジュードは、ここでの“the letter”に相当する結婚ではなく、ファーザー・タイムを息子に迎えたスーとの同棲婚を実質的な結婚として重視しているのである。

結果的には、ジュードとスーの同棲婚は長くは続かなかった。しかし、二人の同棲婚は法律に囚われない、異なる国籍を持つ者たちから成る新しい家族のあり方を提示するものなのである。つまり、ハーディは、植民地の拡大に伴って家族が多様化していたイギリスの実情を、ファーザー・タイムもまじえたジュードとスーの同棲婚に描きこんでいたというわけである。

ジュードとアラベラの再婚生活について目を向けると、それはかつて大学進学を目指して、学問に打ち込むなどして権威や伝統を重視するイギリスを体現していたジュードと、その彼に

憧れたアラベラとの最初の結婚生活とは異なるものである。カートレットが亡くなったことで、生活に困るようになっていたアラベラは、スーとの同棲婚を解消して独り暮らしをしていたジュードに目を付け、彼と再婚する。しかし、実は、彼女がジュードと再婚する決意を固めたのは、ジュードの内面的変化に彼女が気付いたからだと考えられるのである。アラベラはジュードとの最初の結婚生活において、イギリスの権威や学問ばかりを重んじるジュードに失望して、彼と別れることになった。時が経ち、カートレットが亡くなって未亡人となったアラベラは、偶然、ケネットブリッジの市場でパンを売っているスーとその子供たちに出会う。この時アラベラは、スーからジュードが自らパンを作っていることを知らされると、“Jude used to be a proud sort of chap” (312) といって、ジュードの謙虚な働きぶりに驚く。実際、アラベラが再会したジュードは、厳しいイギリス社会の現実に目覚め、学問を修めて聖職者になるという出世欲と金銭欲を捨てている。そして、ファーザー・タイムを息子に迎えるほど寛容な人格の持ち主へと成長している。つまり、アラベラは、ジュードが最初の結婚生活で重要視していた価値観にもはやとらわれていないということに気付き、そのようなジュードを見直して、彼との再婚を決意したと考えられるのである。このような意味で、スーとファーザー・タイムとの暮らしを通じて人間的に成長したジュードとアラベラの再婚には、権威主義的な姿勢を改めたイギリスを評価するハーディの見方が反映されていると考えられるのである。

おわりに

以上の論述から、ハーディが宗主国イギリスとその植民地オーストラリアの間に見られる国際事情を、登場人物の言動を通して作品に反映させていることが明らかになった。その結果、海を越えて、ジュードとカートレットとの間で結婚と離別と再婚を繰り返すアラベラの生き方は、本国イギリスの覇権主義に揺さぶりをかける行為として読むことができるのである。そして、そこには、植民地に対して尊大な態度を取るイギリスへの批判と、植民地オーストラリアを高く評価するハーディの考えが表出されているのである。一方で、ファーザー・タイムを一家の中に受け入れたジュードとスーの同棲婚は、イギリスとオーストラリアの間において共感しあう関係を構築しようとする試みと解釈できるのである。このように、ハーディはイギリスの国家としての優位性の弱まりと、イギリスとオーストラリアの間にあった支配と被支配の関係が崩れていく状況を、『日陰者ジュード』に描出しているのである。

しかし、結局、前夫フィロットソンのもとに戻るスーに向かってジュードが、“Perhaps the world is not illuminated enough for such experiments as ours!” (352) と言うように、彼らのような家族を理解し、受け入れるような風潮が当時のイギリス社会にはなかったということは、ハーディによるイギリスとオーストラリアの共生の難しさの表明でもあると言える。そして、

ハーディは作品の意味の深層部に、何人かの主要な登場人物の生き方を通して、このような国際情勢を描きこんでいたということができただろう。そのような意味で『日陰者ジュード』は、イギリスとオーストラリアの人的交流に伴い、出自の異なった家族が生活する現実を描出することで、両国の価値観の齟齬を描いた小説であると言えるだろう。そして、ここにこそ、イギリスとオーストラリアを視野に入れた時の作者ハーディの国際感覚が、作品の意味の表層下に描きこまれていると言えるのである。

注

- 1 作品の邦訳名は、日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』（東京：音羽書房鶴見書店、2007）において使用されているものに従った。
- 2 その他の指摘として、結婚制度を否定する知性に優れたスーの思想と行動を根拠にゲイル・カニングムは、結婚や性道徳の二重規範を批判し、女性の知性や性の目覚めを描くニュー・ウーマン小説のヒロインとしてスーを分析している。なお、ニュー・ウーマン小説の特徴についてカニングムは、結婚を自己実現の手段とはみなさない点や、母性の再検討などもあげている(106)。
- 3 「ウェセックス小説」の舞台は、ハーディの出身地でもあるドーセット州とその周辺地域にある町や村となっている。そして、その登場人物は、農場経営者、農民、農業労働者、商人や職人といった一般の庶民がほとんどである。ハーディは、この世界を、アングロ・サクソン王国の一つであり、6世紀の初め頃、イングランド南部に建国されたウェセックス王国 (Kingdom of Wessex) にちなんで、「ウェセックス」と名付けた。その結果、彼の小説群は総じて「ウェセックス小説」と呼ばれるようになった。
- 4 本論における本文からの引用は、Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (London: Penguin, 1998) によるものであり、本文中括弧内にその頁数を示した。
- 5 イギリスの英国国教会は1857年の「離婚法」(Divorce Act)によって、夫もしくは妻の不貞や暴力があれば離婚を認めているが、それ以外については認めていない。
WWW. Parliament. UK. 27 Feb 2013
<<http://www.parliament.uk/about/living-heritage/transformingsociety/private-lives/relationships/overview/divorce/>>
- 6 ジュードとアラベラの離婚は、法律と英国国教会において許可されたものと考えられる。第5部第1章で、ジュードとアラベラの離婚とスーとフィロットソンの離婚が同時に許可される判決が下りている。これは、夫もしくは妻の不貞や暴力があれば離婚を認める「離婚法」に基づいて、ジュードとスーの不適切な関係を根拠として、認められたものと思われる。なお「離婚法」は、夫もしくは妻の不貞や暴力によって離婚した場合に限り再婚することを許しており、実際、第6部5章でスーはフィロットソンと教会で再婚をしており、第6部第7章でもジュードとアラベラは牧師の立会いのもとに再婚

している。よって、ジュードとアラベラ、スーとフィロットソンの離婚は、法律と英国国教会で認められたものであると考えられる。

- 7 ファーザー・タイムの容姿が奇妙なものになった原因については、いくつかの解釈がみられ、その一つとしてアラベラの早産の可能性があげられている。また、エレイン・ショーウォルターは、奔放な男性関係からアラベラが感染した梅毒の影響のためとも指摘している(108)。

引用文献

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern Reader of Victorian Literature*. New York: Norton, 1973.
- Bownas, Jane L. *Thomas Hardy and Empire: The Representation of Imperial Themes in the Work of Thomas Hardy*. Farnham: Ashgate, 2012.
- Burke, Kathleen. "Canada in Britain: Returned Migrants and the Canada Club." *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 184-96
- Carpenter, Richard. *Thomas Hardy*. New York : Twayne Publishers , 1964.
- Cunningham, Gail. *The New Woman and the Victorian Novel*. London: Macmillan, 1978.
- Hardy, Thomas. *Far From the Madding Crowd*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *Jude the Obscure*. London: Penguin, 1998.
- Harper, Marjory. Introduction. *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 1-15.
- Ingham, Patricia. *Thomas Hardy*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- "Obscure." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- "Obtaining a Divorce." [WWW. Parliament. UK](http://www.parliament.uk), 16 Oct. 2013.
<<http://www.parliament.uk/about/living-heritage/transformingsociety/private-lives/relationships/overview/divorce/>>
- Showalter, Elaine. "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." *Sex Politics, and Science in the Nineteenth-Century Novel*. Ed. Ruth Bernard Yeazell. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1986.
- シェリントン, ジョフリー 『オーストラリアの移民』 加茂恵津子訳、勁草書房、1985年。
『聖書』 日本聖書協会、1993年。

(はしもと・しほ 外国語学部講師)